

言語能力と認知機構の互換性に関する覚え書き

Remarks on the interaction between linguistic and cognitive ability: evidence from Japanese

菅井三実* 黛穂高**

SUGAI Kazumi MAYUZUMI Hodaka

The aim of this paper is to give some linguistic evidences for the hypothesis that the linguistic ability is linked with more general cognitive abilities common to the perceptual psychology or the ecological psychology, in contrast with the Chomskian idea that the linguistic ability is independent of the other cognitive abilities. The sections 1 and 2 are devoted to the figure-ground reversal, and then the sections 3 and 4 concern the factor of similarity and the theory of affordance, respectively. Throughout the discussion in the text it is maintained, not simply that some linguistic phenomena may be considered as reflecting the psychological principles, but more positively that they cannot be explained theoretically without invoking the psychological principles.

キーワード：言語能力，認知能力，図地反転，類同の要因，アフォーダンス

Key words : linguistic ability, cognitive ability, figure-ground reversal, factor of similarity, affordance

0. はじめに

言語と認知一般の関係に関して、生成文法が「言語が認知機構から独立している」と仮定するのに対し、認知言語学は、「言語は認知機構の一部であって他の認知機構と互換性をもつ」と仮定している。こうした考え方の違いは、具体的な言語分析にさいし、作業仮説として分析の手法や方向性に方法論上の影響を与えるだけでなく、言語理論全体を支える言語観や、言語獲得および言語運用の在り方にも繋がるものであり、部分的に折衷することはできない。ただ、どのような仮説であれ、現実の経験事実を説明できるものでなければならないのであって、言語と一般的な認知能力との関連についても、具体的な言語事実の説明を通して検証される必要がある。

本稿は、認知言語学の立場から、言語能力が他の認知能力(特に知覚)の一部であることを示す証拠について議論するものである。具体的には、第1節および第2節で「図地反転」を取り上げ、第3節と第4節で、それぞれ、「類同の要因」と「アフォーダンス」を取り上げる。ここから、言語能力と一般認知能力の有機的な関連について、積極的な根拠と消極的な根拠が混在することが示される。^[1]

1. 図地反転

第1節で取り上げる概念は「図地反転」の原理であり、単に図地反転と類似した現象を紹介するのではなく、よ

り積極的に、図地反転を用いなければ説明できない言語事実を挙げ、知覚の原理と言語現象との有機的な連関を示す証左とするつもりである。

図地分化および図地反転は、ゲシュタルト心理学において最も良く知られた概念とっていい。図地分化 (figure-ground distinction) というのは、知覚した対象を図 (figure) と地 (ground) に振り分けることをいい、人間の知覚にとって基礎的な認知能力で、知覚のレベルにとどまらず、より高次のレベルでも保持されることが知られている。Langacker(1987)は、ゲシュタルト心理学の知見を積極的に言語研究に導入し、図地分化という概念で主語-目的語の関係を分析しているほか、図地反転 (figure-ground reversal) の概念で受動化を分析してきた。より大きなレベルでは、Talmy(1978)や大堀(1991, 1992a, 1992b)によって、複文における主節と従属節が、それぞれ図と地に対応することが明らかにされたほか、Hopper(1979)は、談話レベルにおいて、未完了アスペクトが談話(物語)における背景的情報(地)を叙述し、完了アスペクトが前景的情報(図)を叙述するのに用いられる傾向が指摘されている。また、Honda(1995)は、提示の there-構文に用いられる動詞の生起について図地反転の原理で分析している。以下では、図地分化の概念を格成分の分析に援用し、一見、非合理的に見える現象が図地反転によって動機づけられていることを示したい。^[2]

具体的な現象として、次のような自動詞構造の文から

*兵庫教育大学第2部(言語系教育講座) **兵庫教育大学大学院

平成17年4月13日受理

分析を始めたい。

- (1) a. 新幹線に乗っていると、慌てた車掌の姿が視界に飛び込んできた。
 b. 新幹線に乗っていると、雪化粧している富士山が視界に飛び込んできた。

このように、変化を表す自動詞構造において、主たる変化を被るのは(必然的に)主格NPになることは自明のように思われる。実際、(1a)で位置的な変化を被っているものとして描かれているのは主格NPの「車掌」であって、この限りにおいて格標示はノーマルなものといっている。これに対し、(1b)では、(1a)と全く同じ述語動詞構造が用いられているにもかかわらず、主格NPの「富士山」は物理的に移動変化を被っていない。むしろ、(1b)で物理的な移動変化を被っているのは新幹線であり、本質的には、新幹線に乗っている話者が主たる位置変化を被っていることは明らかであろう。ここで重要なのは、「富士山」が何ら物理的に位置変化を被っていないにもかかわらず、(1a)と同じように、動詞「飛び込んでくる」を主要部とする動詞句の中で「富士山」が主格(ガ格)で標示されているという点である。この(1b)のような格標示は、一見、非論理的に見えるけれども、図地反転という概念を援用することで、はじめて理論的な説明を与えることが可能になる。すなわち、(1a)では、(新幹線の座席に置かれている)話者の視点を固定することで、「車掌」が主たる位置変化を被るもの(図)として概念化され、主格で標示されているという点でノーマルな格標示であるのに対し、(1b)において、現実には話者(地)が新幹線に乗って移動しているにもかかわらず、自らの移動状態を捨象して、主観的には静止しているという関係の中で「富士山」を捉えることで、物理的には静止しているはずの「富士山」が移動主体(図)として主格で標示されたというものである。ここで作用している原理を平明に整理すれば、およそ、<動いているものを静止させることで、静止しているものを動くように捉えられる>と一般化できると思われる。日常生活の中の知覚的な経験になぞらえて言えば、ホームに止まっている電車に乗って発車を待っていたとき、隣のホームに止まっている電車が俄かに動き始めると、隣の電車が動いたのに自分の電車が動き出したように錯覚することがある。このように、隣のホームにある電車の状態を動いていると情報処理できないとき(静止していると理解したとき)、本来は動いていないはずの自分の電車が動くように見えるという経験は良く知られているところであり、(1b)は、これと同じ原理が作用したというのが本稿の分析である。^[3]

ただし、このような図地反転が起きるには、図として再解釈されるものが認知的に顕著であることが条件とな

る。このことは、次のような例によって例証することができる。

- (2) a. ボールが太郎に当たった。
 b. 太郎がボールに当たった。

いま、「太郎」は位置的に静止しており、そこに向かって「ボール」が空間的に移動し「太郎」と接触する状況を描くとき、(2a)のように、「ボール」を主格で標示し、「太郎」を与格で標示するのがノーマルであるのに対し、(2b)のように、(2a)と全く逆の格標示も自然に容認される。客観的に言えば、(2b)は非論理的に見えるが、現実(2b)が容認されるのは、当該の事象において「太郎」の顕著性(salience)が高くなったことを反映している、というのが本稿の分析である。実際、(2b)が用いられるのは、ドッジボールのように「ボール」と接触することによって「太郎」の地位に変化が起こるような文脈においてであり、そうした文脈においては、空間的な「ボール」の位置変化の大きさよりも、競技の中で「太郎」の地位の変化の大きさが優先されたために、(2b)のような格標示になったというものである。このことは、次の(2c)が容認不可能になるという事実から具体的に確認できる。

- (2) c. ?? 案山子がボールに当たった。

上の(2b)が容認可能であったのと対照的に、普通、(2c)の容認度が低いのは、単に「ボール」と接触するだけでは「案山子」に変化は起こらず、「案山子」の顕著性が「ボール」の空間的な位置変化を上回るとは解釈されなためと説明できる。もし、「ボール」と「案山子」の接触が強い衝撃を伴い、「案山子」に物理的な損傷を生じるような場合は、「案山子」の顕著性が高くなり、(2c)の容認度が回復することも予想できる。いずれにせよ、「案山子」の顕著性の高さ(2c)の容認度には相関関係があり、本稿の分析が現象を正しく予測していることが伺える。

その上で、図地反転によって、客観的に変化を生じているものが「地」として再解釈され<主観的に動きが止められる>と、「図」として解釈されるものが<主観的に動く>ようになるという原理を導き出すことが出来ると思われる。

この仮説により、次のような現象が説明できる。

- (3) a. 日本列島が暴風域に入った。
 b. 渡米の朝、玄関の前で家族全員が見送ってくれた。タクシーが走り出しても、しばらくは私の乗ったタクシーを見ていた。その姿が遠

ざかって行くのを私もタクシーの中からじっと見ていた。

(3a)において「入る」という位置変化を被るのは、明らかに「暴風域」であって、客観的には「日本列島」は位置的に変化しない。それにもかかわらず、「日本列島」が主格で標示されているのは、「暴風域」における位置変化よりも、「日本列島」における天候の変化の方に大きな顕著性が認められたためというのが本稿の分析である。要するに、通常「地」として解釈される実体が「図」として解釈されるには、「図」として解釈されるだけ顕著性が高くなければならず、このことが図地反転の動機づけ(motivation)にほかならない。その上で、図地反転によって、位置変化を続けている「暴風域」が主観的に動きを止められ、「図」として解釈された「日本列島」が主観的に動くようになったと説明される。(3b)において、主たる位置変化(移動)を被るのは、言うまでもなく、「タクシー」あるいは「タクシーに乗った話者」であり、それを見送る「家族」は位置的には変化せず静止しているというのが客観的な記述ということになる。ところが、タクシーに乗って移動している話者の視点から見ると、主観的に「家族」が位置変化を起こし、「遠ざかる」という表現に反映される。

このことは、次の例が示すように、他動詞構造の文を分析するのにも有効である。

- (4) a. 会議の途中で太郎がボタンを外した。
b. 会議の途中で太郎が席を外した。

このような典型的な他動詞構造では、主たる変化が対格NPに生じることが知られており、実際、(4a)でも、対格で標示された「ボタン」が主格の「太郎」の動作によって変化を被るという点で、ノーマルな格標示を受けている。^[4]これに対し、(4b)では、主格の「太郎」が対格の「席」に力を及ぼすところまでは(4a)と変わらないものの、主たる変化は「席」には起こらない。(4b)で主たる変化を被るのは、対格の「席」ではなく、主格の「太郎」自身であり、この点で、(4b)は非論理的な文に見える。こうした現象に対して、定延(1990)は、<場所の変化>と<状態の変化>という2つの変化を区別した上で、どちらが高く評価されるかという観点から分析し、(4b)のような文に関していうと、「太郎」における<場所の変化>よりも、「席」における<状態変化>が高く評価されたために、対格「席」が図として把握され、対格で標示されたということになる。しかし、(4b)が描く状況に関して、「席」が<誰かが座っている状態>から<誰も座っていない状態>に変化したこと(度合い)と、「太郎」が空間的に位置変化したこと(度合い)の大きさを比べた

とき、前者の方が大きいと判定する客観的な基準は見出されない。このようなケースでも、本稿が言うように、図地反転の原理を用いれば、通常なら変化を被るはずの対格NP(=「席」)が固定されることで、本来なら位置変化を被らないはずの主格NP(=「太郎」)に空間的な位置変化が生じる現象として説明することが可能になる。こうした例から、<動いているものを静止させることで、静止しているものを動くように捉えられる>という一般化が他動詞構造でも見出されることが分かるであろう。さらに言えば、本稿の分析を採用すれば、(4a)と(4b)に見られる動詞「外す」の意味を多義として扱う必要はないということになるのである。^[5]

以上、本節では、図地反転の原理が自動詞構造と他動詞構造の両方に見られることを確認した。これを踏まえて、次節において本格的な言語分析に入りたい。

2. 図地反転による多義分析

第2節では、前節での分析を踏まえ、スキーマ分析によって多義構造分析をする上で、図地反転の原理を援用することによって説明が可能になる事例を取り上げる。具体的に取り上げるのは、動詞「失う」の多義現象であり、次のように例示されるものである。

- (5) a. 事業に失敗し、ほとんどの財産を失った。
b. 頭を強く打って一時的に記憶を失った。
c. 5対1でリードしていたが、ホームランで2点を失った。

ここに見られる3種類の用法を多義とみなすかどうかは議論の余地も大きいですが、それぞれの意味の差異に簡単にコメントしておきたい。(5a)の場合、およそ「初期の状態で<自分の領域>にあった「財産」が<別の領域>に移動することによって、結果的に、<自分の領域>に存在しない状態が出来る」と記述できる。(5b)の「失う」は、<自分の領域>にあった「記憶」が<別の領域>に移動するという点では(5a)と変わらないが、(5a)との相違点として、どこか<別の領域>に移動するというのではなく、むしろ、<自分の領域>に存在しない状態になることにフォーカスが置かれる。また、(5c)の「失う」は、(5a)や(5b)と大きく異なり、「5対1」でリードしている状態で、「2点を失う」ことがあっても、5点から2点が減じられて「3点」になるということはない。実際、「5対1」でリードしている状態で、2点を失えば、スコアは「3対1」にはならず、敵方(相手チーム)に「2点」が「加えられる」ことで、「5対3」の状態になる。

そこで、(5c)のような、やや特異な意味用法を含めて「失う」の意味を統一的に分析するため、本稿では、下

記の図1のようなイメージスキーマを導入する。

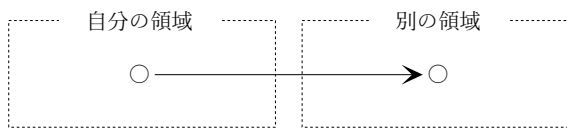


図1：動詞「失う」の基本スキーマ

この図1では、＜自分の領域＞と＜別の領域＞という2つの領域が設定され、初期状態に、「○」で表示された対格NPが＜自分の領域＞にあり、それが＜別の領域＞に移動することによって、最終的に、＜自分の領域＞に存在しない状態が出来るという関係を描いているものと理解されたい。専門的にいえば、この図1は、ベース(base)だけが表示され、特定の部分に焦点化(プロファイリング)が与えられていない状態になっている。

図1から、(5a)の意味を説明するために必要な焦点化を与えたものが下記の図2であり、図の中で「●」や「→」のように太くなった部分がプロファイリングされた部分とする。

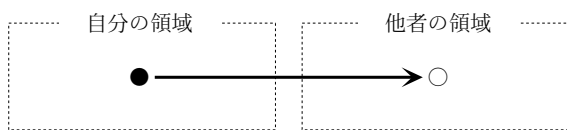


図2：「財産を失う」

この図1の関係を上述の用例(5a)に適応すれば、「初期の状態で＜自分の領域＞にあった「財産」が＜別の領域＞に移動することによって、結果的に、＜自分の領域＞に存在しない状態が出来る」という関係を描いていると理解されたい。特に、＜自分の領域＞から外に出て行くことを焦点化することで、特徴づけられる。また、図1で＜別の領域＞とされた部分については、図2において「財産」が＜自分の領域＞から他者へ移動したという意味で＜他者の領域＞とするのが適当であろう。

次に、(5b)における「失う」の意味を図1で説明しようとするれば、次の図3のように示すことができる。

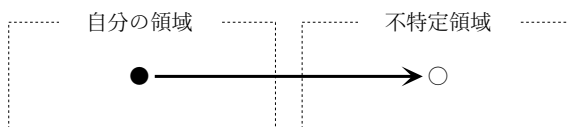


図3：「記憶を失う」

(5b)において対格NPの「記憶」は、＜自分の領域＞に存在しない状態になるが、その結果、どこに移動したかは特定されていない。むしろ、(5b)のような意味の場合、移動した結果は不特定なのが通常であるから、図1で＜別の領域＞とされた部分は、図3では＜不特定領域＞とするのが適当であろう。このとき、＜他者の領域＞と

＜不特定領域＞とは、決して大きく異なるものではないことから、それぞれ図2と図3で表わされる(5a)と(5b)の「失う」は、大きな違いではないことが伺われよう。

問題は(5c)の「失う」である。(5c)の例において、「5対1」でリードしている状態で、「2点を失った」とき、当初「5点」だった自分の得点が2点減って「3点」になることはない。(5c)に関して最も特異なのは、「失う」という事象を通して「5」が「3」になることがない一方で、当初「1点」しかなかった相手チームの得点が「3」に増えるところにある。この関係をスキーマに反映させると、次のように図示できる。

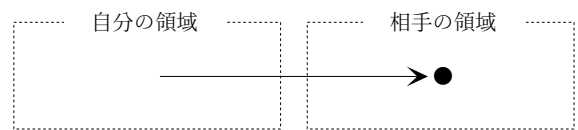


図4：「2点を失う」

この図では、当初＜自分の領域＞にあった得点は何ら減じられることはなく、＜別の領域＞に「1」から「3」への増加が起こるといふ変化が描かれている。このとき、得点が増加する右側の領域は、明らかに特定されていることから＜相手の領域＞でよいことになる。

ここで注意すべきは、(5c)のような「2点を失う」という言語表現の成立に対し、この図4だけでは最終的な説明を与えることはできないという点である。この関係を引き起こす必須の動機付けとして作用するのが第1節で詳説した図地反転の原理である。この原理の発動を視覚的に説明するために、次の図5～図7を導入する。

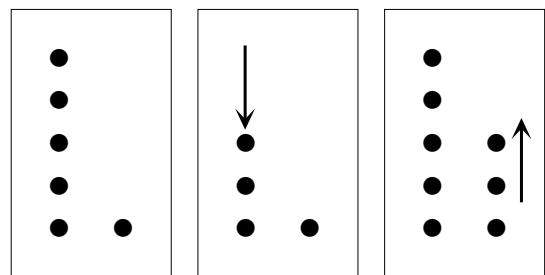


図5：5対1

図6：3対1

図7：5対3

図5は、(5c)において「2点を失う」前の状態である。「失う」の意味を(5a)や(5b)と同じように解釈すれば、図6が描くように、「5点」から「2点」が減じられて「3点」になるということになるが、すでに確認したように(5c)の意味はそうではない。実際には、図7が描くように、自分のチームの「5点」に変化はなく、相手チームの「1点」に「2点」が加えられて、結果的に「5対3」になるというものであった。このとき、(5c)の意味が生じるのに、図地反転の原理が作用していることは明らかであろう。すなわち、自分のチームの点数が変化す

るところで、その変化を止めることで、本来なら変化の起きないはずの相手チームの得点が増加するように見えるというものである。付け加えれば、(5c)の描く事象は仮現的(apparent)ではなく、(5c)の意味で慣習化されており、この点で、(1b)(2b)(3a)(3b)(4b)と異なるということになる。いずれにしても、上述の考察から分かることとして、(5a)と(5b)の差異は、図3のような「失う」のベースに対するプロフィールの違いに帰着できるが、(5c)の用法は、プロフィールの違いに、図地反転の原理が作用しなければ生じないということである。

以上、本節では、図地反転が言語事実の説明に決定的に作用するケースを指摘し、言語能力が知覚という他の認知機構と関連していることを言語事実から例証した。

3. 類同の要因

この節では、等位構造における曖昧現象に対して、群化の法則(類同の要因)に基づく説明を試みる。名詞の等位接続関係を含む修飾構造では、しばしば、解釈に曖昧性が生じる。本節では、等位接続される名詞の類同性が等位接続の関係に影響を与えるケースを取り上げ、この現象の説明に<類同の要因>が決定的に作用することを示し、言語の解釈に知覚心理学の要因が作用することを示したい。

具体的な現象として、次の(6a)を見て頂きたい。

(6) a. 太郎と次郎に関係の無い三郎が来た。

ここには、「太郎」「次郎」「三郎」の3つの名詞句のうち、どれとどれが等位接続されるかによって2通りに曖昧になり、次のように表記できる。

(6) b. [太郎と次郎]に関係の無い三郎が来た。
c. [太郎]と[次郎に関係の無い三郎]が来た。

(6b)は「太郎と次郎」が等位接続されるという解釈で、結果的に「来た」のは「三郎」だけを指示するというものであり、(6c)は「太郎」と「次郎」が等位接続されず、結果的に「太郎と三郎」の2人が「来た」という解釈である。このとき、2つの読みは五分五分の確率で解釈されるというより、前者の読みが圧倒的に優位にあって、後者の解釈はゼロに近い。^[6]

もちろん、上の(6)において(6c)の解釈が弱いことには、構造的な要因も作用する。等位接続の原則は、統語的に同じ地位にあるものであるから、(6c)のように、「太郎」と「三郎」の等位接続においては、「太郎」に修飾句がない一方、「三郎」には「次郎に関係の無い」で修飾され、統語的に対等の関係ではない。この点も、(6c)の解釈が弱くなる要因の1つになっていることも考

慮に入れておく必要がある。それにもかかわらず、次のようなケースでは事情が変わる。

(7) a. 太郎と企業に関係の無い三郎が来た。

この例は上の「次郎」を「企業」に変えたものであるが、解釈が2通りに曖昧になるという点では上のケースと基本的に同様であり、次のように表記できる。

(7) b. [太郎と企業]に関係の無い三郎が来た。
c. [太郎]と[企業に関係の無い三郎]が来た。

(7b)の解釈では結果的に「来た」のは「三郎」だけであるのに対し、(7c)では「太郎」と「三郎」が「来た」という解釈になる。このとき、(6)のケースと大きく異なるのは、(7b)のように「太郎と企業」を等位接続させる解釈よりも、(7c)のように「太郎」と「企業」を等位接続させないで、「太郎」と「三郎」を等位接続させる解釈が、かなり強くなるという点である。(7b)と(7c)の比較において、なお(7b)の方が(7c)よりも優勢かもしれないが、上の(6)のケースにおいて(6c)の可能性がゼロに近かったのと比べると、(7)では(7c)の解釈を受け入れられる可能性が相当に高まっていることは確かであろう。

こうした解釈の差異を生じさせる(6)と(7)の構造上の違いは、次のように分析できる。すなわち、(6)では等位接続され得る3つの名詞の全てが人名であるという点で3つが同じ性質を持ち、統合関係(syntagmatic relation)において「近くにあるもの」同士が等位接続される解釈が優先されたのに対し、(7)では3つの名詞のうち、2つは「人名」で、1つが「組織」であり、近接関係よりも、同じ性質もつという類同関係が近接関係と競合したというものである。このことを知覚心理学の概念で捉えなおすと、等位接続され得る3つの名詞が同じ条件であれば「近接の要因」が作用するが、当該の3つの名詞が質的に異なれば性質の同じものを等位接続させようとする「類同の要因」が作用するということになる。

ここでいう「近接の要因(factor of proximity)」も「類同の要因(factor of similarity)」も、知覚的に形態をまとめる(体制化する)ときに作用する「ゲシュタルトの要因(factor of configuration)」に含まれる要因で、近接の要因は、「近い距離にあるものは、まとまって知覚されやすい」ことをいい、類同の要因は「形や大きさなど性質が同じものは、まとまって知覚されやすい」というものをいう。これらの概念を視覚的に説明するため、次のように12の丸印を描き、白丸○と黒丸●の配置は変えないものとする。

(8) ●○○●●○○●●○○●●

これらの丸印を2つずつに分けるとするとき、理論的には、(9)のように区切ることも可能であるが、通常は、(10)のように分けられる傾向が圧倒的に強い。

(9) ●○ ○● ●○ ○● ●○ ○●

(10) ● ○○ ●● ○○ ●● ○○ ●

視覚的には、(10)のように「まとまり」を作っているというのがゲシュタルト心理学の定説であり、これを支える要因を「類同の要因」という。

上に挙げた解釈の差異から、「近接の要因」と「類同の要因」が競合していることが伺える。「近接の要因」というのは、要するに「近いものがまとまる」というもので、「類同の要因」というのは、「性質(大きさ・色・形など)の同じものがまとまる」というものである。ここで重要なのは、視覚レベルで作用する「類同の要因」は言語レベルの意味にも投影されているということである。しかも、上述の現象を統語的な規則で説明することは不可能で、意味的な要因だけでも説明できないという点に注意されたい。

このことを踏まえると、次のペアにおいて、どちらの読みが優勢になるかについての予想が可能になる。

- (11) a. 病院と企業に関係の無い大学を訪れた。
b. [病院と企業]に関係の無い大学を訪れた。
c. [病院]と[企業に関係の無い大学]を訪れた。

(11a)も2通りに曖昧で、(11b)のように、「病院」と「企業」を等位接続させる解釈で、もう1つは、(11c)のように結果的に「病院」と「大学」が等位接続される解釈であるが、「病院」「企業」「大学」のうち、2つが他の1つと区別されるような類似性(あるいは差異)が認められない限り、類同の要因は作用せず、統語的に対応の関係にある「病院」と「企業」が等位接続される(11b)の解釈が優先されるのは、前述の通りである。

さらに、次のような例でも同じことが言える。

- (12) a. 国立大学と企業に関係の無い私立大学を訪れた。
b. [国立大学と企業]に関係の無い私立大学を訪れた。
c. [国立大学]と[企業に関係の無い私立大学]を訪れた。

(12)では、等位接続され得る3つの名詞「国立大学」「企業」「私立大学」の中に一定の類似性(あるいは差異)が認められ、「国立大学」と「私立大学」が「大学」と

いうカテゴリーの下位メンバーであるのに対し、「企業」は「大学」とは別のカテゴリーのメンバーである。このとき、(12b)と同じほど(12c)の解釈が高いのは、類同の要因によるものと解釈され、なおかつ、類同の要因を援用しなければ、(12c)の解釈の高さを説明することができないという点に注目されたい。言語における意味の解釈に(知覚という)言語以外の認知能力が決定的に作用するという事実こそ、本稿が例証しようとする「言語能力と認知能力との互換性」を示す理論的根拠にほかならないからである。^[7]

残された問題は、どのような関係が厳密に「類同」にあたるかという点であるが、本節で取り上げた例に関する限り、少なくとも知覚心理学的な「近接の要因」および「類同の要因」が確実に作用することは確認できたと思われる。

4. アフォーダンス

第4節で援用する概念は「アフォーダンス(affordance)」で、Gibson(1979)において「環境と知覚者の関係がつくる情報」として提案された概念である。佐々木(1993:98)の記述を援用してもう少し詳しく言うと、人間が何かを見るときは単に対象がもつ固有の特徴——例えば「長さ」や「固さ」など——だけに目を向けるのではなく、身体をベースにした「行為の可能性」を見ている、というのがアフォーダンスの理論である。例えば、ドアのノブ(取手)は、人に手で握られるべく作られており、握るという行為の可能性を人に提供している。このとき、ノブは「握る」という行為を「アフォードする」という。行為をアフォードするかどうかは知覚者との関係に決定的に依存するので、例えば、高さ70センチくらいの平らな石は、多くの成人に「腰掛ける」という行為をアフォードするが、同じ石でも犬や象に「腰掛ける」という行為をアフォードすることはない。具体的な事例を2つだけ挙げておこう。まず、佐々木(1993)によると、カマキリは獲物を見たとき決して闇雲に手を出すことはせず、自分の手の長さや大きさを基準にして捕獲できるか否かを判断するという。もう一つは人間の場合で、腰掛けに手を使わずに座れるかどうかの境界は、椅子の高さを脚の長さで割った数が0.9~0.95のところにあるという。繰り返し確認するが、アフォーダンスは属性の集合体ではない。小林(1992)がいうように、属性が生体(知覚主体)と独立して定義できるのに対して、アフォーダンスは生体(知覚主体)と環境との関係においてのみ初めて定義されるからである。

具体的に、行為の可能性という観点から分析されるべき言語事実として、次のような例が挙げられる。

- (13) a. 椅子に座る。

- b. ?? 椅子に立つ。
- c. 椅子の上立つ。

この例から、行為をアフォードするかどうかによって格標識に変化が生じることが伺える。すなわち、「椅子」は経験的に「座る」という行為をアフォードするように作られているので、動詞「座る」に対して「椅子」は「に」という単純な形式で標示される。しかし、(13b)が示すように「椅子」は「立つ」という行為をアフォードしないので、「立つ」という行為に関しては「椅子」は無標の格標識では標示できず、(13c)のように「の上」にという複合辞を使わなければならない。この言語事実に関して重要なことは、行為をアフォードしないものを標示するときは、行為をアフォードするものを標示するときに比して、より有標(marked)の形式が必要とされ、こうした有標性に関する(13a)~(13c)の差は、アフォードンスという概念を援用しなければ説明できないという点である。^[8]

では、「椅子」を「梯子」に変えたらどうだろうか。

- (14) a. 梯子をあがる。
- b. ?? 梯子を歩く。
- c. 梯子の上を歩く。

この場合、「梯子」は「あがる」という行為をアフォードするので「を」という無標の形式で格標示されるが、「歩く」という行為はアフォードしないため「の上を」という有標の形式で標示しなければならない。これに対し、今度は「梯子」を「階段」に変えてみると、次の(15)が示すように、(15a)も(15b)も自然に容認される。

- (15) a. 階段をあがる。
- b. 階段を歩く。
- c. ?? 階段の上を歩く。

ここで、(15a)も(15b)も自然に容認されるのは「階段」が「梯子」と異なり、「あがる」ことも「歩く」こともアフォードするためにほかならず、むしろ、(15c)のように「の上」という有標の形式を用いると、容認度が低くなる。このとき、(15c)の容認不可能性に対する説明は、アフォードンスの概念を援用しなければ成立しないだろう。

もう一つだけ格標識と複合辞の関係を見てみると、次のペアでは「病院」の格標示によって曖昧性に差異が生じる。

- (16) a. いま太郎は病院にいる。
- b. いま太郎は病院の中にいる。

つまり、(16a)は二通りに曖昧であり、空間的に「病院」という建物の中にいるという解釈のほか、もう少し限定して「入院」しているという解釈が可能であるのに対して、(16b)の解釈は「病院」という建物の中にいるというものに限られ、入院しているという解釈はない。このとき、(16a)のように「病院」という名詞に対し無標の標示のときにのみ「入院」の解釈が生じるということは「病院」が「入院」という行為をアフォードするためと説明されるが、(16b)のように「の中」という複合辞によって「入院」の解釈が消えることも興味深いと思われる。複合辞によって、「病院」という医療施設が単なる建築物に空間化されたことで「入院」をアフォードすることができなくなったと説明できるからである。

以上が、日本語における格標示の有標性をアフォードンスという観点から観察した分析である。^[9]

5. 結語

本稿では、言語現象を一般的な認知能力との関連で考察を加え、言語能力が一般的な認知能力と有機的に結びついていることを例証してきた。第1節から第4節で挙げた現象は、それぞれ、図地反転、類同の要因、アフォードンスという心理学的な概念を援用しなければ説明を与えることができないという点で、言語が認知機構の一部であることを示す証左となると思われる。

注

- [1]以下で用いる「図地反転」「類同の要因」「アフォードンス」などの心理学の諸概念に関しては、辻(2002)において言語学との関連で平明に解説されている。
- [2]認知言語学的な研究では、他動詞と自動詞の区分に関して、Hopper and Thompson(1980)のプロトタイプ分析を受け入れ、両者を画然と区分することを回避し、両者を連続的に性格づける手法が支持されている。本稿も、自動詞構造と他動詞構造が峻別できないことを承知した上で、「典型的な自動詞構造」という用語が「対格を実現せず、主たる変化が主格成分に生じる構造」を指し、「典型的な他動詞構造」が「対格を実現し、対格に主たる変化が生じる構造」を指すものとする。このとき、「主たる変化が生じる」ものが図地分化の「図」にあたり、それ以外が「地」ということになる。なお、図地反転と言語現象との関連については、山梨(1995:9-18, 2000:19-54, 2004a)も参照されたい。
- [3]山梨(2004b:11)は「最近、源氏物語が面白くなってきた」や「例の数学の問題がやさしくなってきた」のような例を図地反転の例として挙げているが、これらの例は<動いているものを静止させることで、静止しているものを動くように捉えられる>という

本稿の仮説を時間変化の中で応用することによりカバーされる。すなわち、実際に変化しているのは「主体の理解(ないしは解釈)」であるのに、それを静止させることで、実際には変化していない「源氏物語」や「数学の問題」が変化するように捉えられていると説明することができるからである。

- [4]典型的な他動詞構造において主たる変化が対格におこることは類型論的にも普遍性の高いことはTsunoda (1985)が示したとおりであり、現代日本語において対格が変化を被る格成分であることの理論的根拠は菅井(1998, 2003)で例証した。
- [5]定延(1990)も、図地反転の有効性を否定しているわけではなく、Talmy(1975, 1978)の概念を引用し、「Figure/Ground」は移動事象と存在事象の統一的把握にとって都合の良い概念と言えるが、移動事象に限って言えば、物理的動静関係以上の関係を表すのかどうか、はっきりしないようである」と、慎重な姿勢をとっていることは確認しておきたい。
- [6]山中(1988, 2000)では、例えば、「地元の政治家や学者」のように、修飾句「地元の」が「政治家」だけを修飾するか「政治家」と「学者」の両方を修飾するかで曖昧になるケースを取り上げ、この種の修飾構造に関する限り、名詞「政治家」と「学者」の語彙的な類似性は必ずしも強い要因ではないと述べているが、類同の要因が作用する力は構造によっては違いがあるようだ。
- [7]もちろん、表記上、読点「,」を挿入すれば意味の解釈は誘導を受けるが、このことも、意味解釈に視覚情報が影響を与えることにほかならない。
- [8]さらに言えば、「教壇」は「立つ」ことをアフォードするので「教壇に立つ」は成立する。
- [9]本稿の第4節の内容は、菅井(2001)の第3節と重複する。

参考文献

- 大堀俊夫 1991 「文法構造の類像性——『かたち』の言語学へ」 日本記号学会(編)『かたちとイメージの記号論』東海大学出版会, pp.95-107.
- 大堀俊夫 1992a 「現代言語学のトピックス⑩ "The bike is near the house./ ?? The house is near the bike." <認知図式と構文>」『言語』第21巻・第7号(1992年6月号), pp.82-85.
- 大堀俊夫 1992b 「イメージの言語学」『言語』第21巻・第12号(1992年11月号), pp.34-41.
- 小林春美 1992 「アフォードンスが支える語彙獲得」『言語』第21巻・第4号(1992年4月号), pp.37-45.
- 佐々木正人 1993 「認知科学の新しい動向 [5] ——アフォードンス」『言語』第22巻・第5号(1993年5月号), pp.96-101.
- 定延利之 1990 「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係」『言語研究』第98号, pp.46-65.
- 菅井三実 1998 「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』130(文学44), pp.15-29.
- 菅井三実 2001 「意味分析における単純性と複雑性」『プロブレマティーク』第2号, pp.86-101.
- 菅井三実 2003 「空間における文法格『を』の意味分析」田島毓堂・丹羽一彌(編)『日本語論究VII・語彙と文法と』和泉書院, pp.475-499.
- 辻 幸夫(編) 2002 『認知言語学キーワード事典』研究社.
- 山中信彦 1988 「日本語の多義的な名詞修飾構造の解析」『言語研究』第94号, pp.75-99.
- 山中信彦 2000 「いわゆる『若い男と女』の多義性について」山田進・菊地康人・舛山洋介(編)『日本語——意味と文法の風景——国広哲弥教授古稀記念論文集』ひつじ書房, pp.257-273.
- 山梨正明 1995 『認知文法論』ひつじ書房.
- 山梨正明 2000 『認知言語学原理』くろしお出版.
- 山梨正明 2004a 「言語に反映される図・地の分化と反転現象」河上誓作教授退官記念論文集刊行会(編)『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集』英宝社, pp.49-67.
- 山梨正明 2004b 『ことばの認知空間』開拓社.
- Gibson, J.J. 1979 *The ecological approach to visual perception*. Boston: Houghton Mifflin.[邦訳]古崎敬(ほか訳)『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社.
- Honda, Akira 1995 "Figure-Ground Reversal in the Presentational There-Construction," 『長谷川欣佑先生還暦記念論文集』研究社, pp.381-390.
- Hopper, P.J. 1979 "Aspect and foregrounding in discourse," In Givón, T.(ed.) *Syntax and Semantics: Discourse and Syntax. Vol.12*. Academic Press, pp.213-241.

- Hopper, P.J. and S.A. Thompson
1980 "Transitivity in grammar and discourse." *Language*, Vol.56(2), pp.251-299.
- Langacker, R.W.
1987 *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*: Stanford CA: Stanford University Press.
- Talmy, L. 1975 "Semantics and syntax of motion," In Kimball(ed.), *Syntax and semantics* (Vol.4). New York: Academic, pp.181-232.
- Talmy, L. 1978 "Figure and ground in complex sentences," In Greenberg, J.H.(ed.) *Universals of human language* (Vol.4) Syntax. Stanford Univ. Press, pp.625-649.
- Tsunoda, T. 1985 "Remarks on transitivity," *Journal of Linguistics*, Vol.21. pp.385-96.